様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：２１５０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１５９５９

研究課題名（和文）精神科入院患者の地域移行を促進する病棟地域連動型リカバリー支援ツールの開発

研究課題名（英文）Development of a linked recovery support tool to promote psychiatric inpatient to the community

研究代表者
安保　寛明（Ambo, Hiroaki）

山形県立保健医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：００３４７１８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：外来患者を対象に精神健康の回復に有益な集団活動（WRAPクラス）の実施によるFeasibilityの精査を行い、精神症状などに有益な表現をインタビューによって整理した。
これらを踏まえ、精神疾患を有する人のWRAP活用アプリを開発した。心の元気度を聞く（アセスメント）、その元気度に応じてプランを推薦しつつ選択をすすめる（プランの選択）、翌日以降のアクセスにおいてその後の元気度とプランの有効性を聞く（プランの評価）という3つのフェイズで形成した。WEBアプリケーションでの満足度は概して高く、スマートフォンなどからのアクセスによって継続的に使用する可能性が十分にあることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来から、患者自身が精神健康の回復に向けた行動プランをもつことが患者自身の回復に有益であることは明らかになっていたが、行動プランを使いこなすことを支援する方法はなかった。
日本では精神科への入院期間が長いために入院期間のあいだに精神健康の回復に向けた心理教育やストレス対処行動の獲得がなされることが多いが、入院中に整理した行動プランを退院後に活用できるアプリケーションがあることで、入院中に獲得した知識や工夫を忘れにくくなり、再入院が少なくなる可能性が期待できる。

研究成果の概要（英文）：We examined the feasibility of outpatients by a group activity (WRAP class) that is useful for the recovery of mental health.
Based on this feasibility study, we developed a WRAP application for people with mental illness. This application consists of 1) mental health assessment, selecting a action plan, evaluation this effectiveness of action.
Satisfaction with the WEB application was high, and it was found that there is a good possibility that it would be used continuously by accessing from a smartphone.

研究分野：精神保健学　精神看護学

キーワード：リカバリー　コンコーダンス　精神看護　WRAP　元気回復行動プラン　地域定着　地域移行

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

精神疾患患者に対する心理社会的介入の方法が明らかになりつつある。英国および米国では、有効性のある心理社会的介入を統合し「疾病管理とリカバリープログラム（Illness Management andRecovery：IMR）」を展開している。また、こころの元気に焦点を当てた WRAP と呼ばれるプログラムも有効性が確立しつつある。これらは、患者の回復過程を直接とりあつかう点で特長があるが集団を対象としたプログラムであり、入退院の時期がそれぞれ異なる入院中での適用にはまだ有効性が実証されていなかった。

一方、個別支援では ACT（訪問による包括的地域支援）が有益であり、わが国でも人口規模 10-30 万人に 1 チームの ACT が必要であることが分かってきている。この ACT においてもリカバリーモデルを基に患者と関わる点で特長があり、入院中の個別支援にも応用可能である可能性がある。

２．研究の目的

疾病自己管理と回復（Illness Management and Recovery：IMR）プログラムや元気回復行動プラン（WRAP）はわが国でも実践例が増加してきており、発祥国の米国では一定の治療的成果が立証され始めている。一方個別支援では、リカバリー概念を個別面談やケアマネジメントの段階で取り扱うツールが存在し、米国では「リカバリーゴールワークシート」という名称で用いられ、わが国では相談支援従事者研修や精神保健福祉の退院促進ツールとして活用され始めている。

わが国では入院期間が米国等諸外国より長い特徴があり、入院医療を担う中核的な職種である看護師がこれらの介入法やツールを使用できることが望ましい。そこで看護師が当事者と協働関係を構築する過程を明確化するとともに地域移行と地域定着に活用できる介入法を開発し、その有効性をリカバリーの視点から検証する。

３．研究の方法

調査１．看護師・当事者・ピアスタッフへのインタビュー調査

東北地方にある精神科病院３施設において、デイケア部門、訪問看護部門、地域支援（退院促進を含む）部門に勤務する精神科看護師およびその医療機関のある地域に暮らす当事者等に、事前に書面にて同意を得て以下の質問を行った。

対象（１）看護師：精神科医療機関に勤務する看護師

（２）当事者とピアスタッフ：対象（１）の地域に住む精神医療ユーザー（10 名程度）

質問項目：主な質問は以下のとおり。

・疾病管理とリカバリー（IMR）プログラムに関する認知度、実施度
・元気回復行動プラン（WRAP）に関する認知度、実施度
・リカバリーに視点を置いた援助の例
・ストレングスを重視したアセスメントや援助の例
・看護師およびピアスタッフには、業務上の事項（職位、所属、勤続年数、協働者）

調査２．フィールドワーク

調査 1）で調査を行った精神科医療機関および関係する事業所において、参加観察法による IMR,WRAP に関するフィールドワークを行った。

具体的な観察項目は、プログラムや援助の内容（構成、参加者など）、援助における協働性の担保やリカバリーの促進のために行っている具体的な工夫（協働が脅かされやすい場面を文献 1）などから参考にし、その場面での行動を記録）、援助における工夫と意味の関連（許可が得られる場合は観察場面後にインタビューを実施）とした。

調査３．リカバリー促進モジュール（アプリ）の開発

１）を踏まえて地域移行および地域定着での使用を想定した面談モジュールを作成し、アプリケーション化した。リカバリー面談モジュールは、以下の点に留意して作成した。

A.　精神科急性期治療病棟や救急病棟の看護師等も使用するため、60～90 日の在院期間のあいだに 6～8 回の面談を想定してモジュールを作成した。B.　看護師が相談支援専門員やピアスタッフや精神保健福祉士と協働しやすくするため、上記の 4 種類の面談モジュールの活用にはリカバリー、ストレングス、エンパワメントの概念が含まれるようにする。モジュール作成には、カンザス大学の研究チームが作成して公開している「リカバリーゴールワークシート」をもとに岩手県が作成した「私の希望する暮らし 3)（相談支援従事者向けの面談シート）」を参考にした。C.　前年度の調査をもとに、面談中にできるアセスメントや言葉かけの例を作成する。

D.　開発には、急性期治療、訪問看護、デイケアで勤務する看護師各５ 名程度と精神科医療機関または福祉事業所で勤務するピアスタッフ３ 名に協力を得る。面接シートと面談のフローをもとに試行してもらう。

４．研究成果

調査１．看護職者への面接調査ではリカバリーに視点を置いた援助例として、退院後の生活と呼ばずにリカバリーゴールと呼ぶことで心理的側面を話題にする、地域生活において複数の人の関係調整が必要な場面で権利擁護の観点を取り入れる、長期的に健康や生活に悪影響のありそうな生活習慣（例. タバコや飲酒）について即時中止ではなくストレス対処方略の増加に視点を置く、などが存在していた。

また、IMR と心理教育の違いを明らかにすべく、WRAP などのリカバリー志向のプログラムの経験を一定以上有する精神障害を有する者（当事者）に対して IMR に用いられる映像や資料を読んでもらい、精神症状に関する表現やリカバリー志向とのバランスについての評価を聞いて比較した。当事者によると「幻聴」「妄想」よりも「存在しないものが聞こえる」「頑なで誤った確信」といった表現によって自分の立場から見た表現となっていて受け入れやすい、ストレス対処の全体像の中で治療等を扱うので自分に自信を持ちやすい、といった意見が得られた。

調査２．退院促進や地域定着に有益な援助様式を明確化することを目的として、精神科医療機関の IMR および WRAP に該当する活動を行っていない医療機関に赴き、前年度に行った IMR や WRAP に該当する活動を行う医療機関との援助場面や環境の違いを比較した。

2016 年度にフィールドワークした活動においては、以下の特徴が見出された。１）当事者と援助職者は互いに敬称を用いないなどの権威性の緩和を用いており、具体的には呼ばれたい名前を用いる、自己紹介に勤務経験や職位を言わない、２）リカバリー概念について「私は・・」などのＩメッセージを多用するとともに権威的な他者の考えを紹介することを控えている（例. リバーマンは○○等を言わない）３）参加者の発言や考えの多くを筆記して可視化し、ファシリテーターあるいはサポーターが声に出して読み上げる　４）プログラムの冒頭で安心のための同意（合意）を共有して合意形成を明確化する、といった特徴が存在していた。

さらに、追加してフィールドワークした活動において、IMR や WRAP を行わない医療機関には以下の特徴が見出された。１）リスク管理の方法として行動範囲や所有物の制限が選択肢にあり、一部は実際に制限のニュアンスを持つ表現で実際に言語化されている　２）敬称や職位などを単体で呼ぶ傾向があり、例えば主治医については「○○（名字）先生」ではなく「先生」、受け持ち看護師については「○○（名字）さん」ではなく「担当」と呼んでいる、３）質問や疑問に関する対話の場面ではお互いの考えの相違点に注目したり、考えに注目せずにその場にいない人物に解決の鍵を求めたりする場面が多くみられた。

調査３の結果、精神疾患を有する人 8 人に対して WEB アプリケーションの形で試行した。WEB アプリケーションでの満足度は概して高く、スマートフォンなどからのアクセスによって継続的に使用する可能性が十分にあることがわかった。

＜引用文献＞

１）Lisa K, Helle SD, Jane L, et al., Illness management and recovery programme for people with severe mental illness: Cochrane Intervention Protocol, CD011071, 2014

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 安保寛明	４．巻 32
２．論文標題 コンコーダンスによる共同意思決定とセルフケア概念への影響	５．発行年 2017年
３．雑誌名 日本保健医療行動科学会雑誌	６．最初と最後の頁 20-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安保寛明	４．巻 17
２．論文標題 臨床スタッフの服薬サポート　患者の気持ちに寄り添うコンコーダンス・スキル	５．発行年 2017年
３．雑誌名 精神科臨床サービス	６．最初と最後の頁 439-441
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安保寛明	４．巻 44
２．論文標題 精神科看護師のWRAP実践記	５．発行年 2017年
３．雑誌名 精神科看護	６．最初と最後の頁 27-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安保寛明	４．巻 20
２．論文標題 アクティブラーニングに向けた私の授業の工夫	５．発行年 2017年
３．雑誌名 精神看護	６．最初と最後の頁 316-320
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤 大輔，安保 寛明，後藤 剛	4．巻 20
2．論文標題 山形県内の事業所におけるうつ病休職者の実情や復職条件に関する調査	5．発行年 2017年
3．雑誌名 山形保健医療研究	6．最初と最後の頁 73-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安保寛明	4．巻 19
2．論文標題 長期入院精神障害者の地域移行への理解を深める看護学教育の試み	5．発行年 2016年
3．雑誌名 山形保健医療研究	6．最初と最後の頁 19-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 Hiroaki Ambo
2．発表標題 Peer support Promotion in Mental Health Services in Japan
3．学会等名 The 2nd Eastern European Conference of Mental Health（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 Hiroaki Ambo
2．発表標題 Community Mental Health in Japan- Focus on Suicide Prevention
3．学会等名 The 2nd Eastern European Conference of Mental Health（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 笹井瞳，安保寛明
２．発表標題 精神疾患を有する人からみたIMRにおいて有益な工夫
３．学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第26回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hiroaki Ambo
２．発表標題 Peer Support Program using Wellness Recovery Action Planning at Tsunami-Affected areas in Iwate, Japan
３．学会等名 21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 安保寛明，笹井瞳
２．発表標題 精神障がいをもつ人の表現がアサーティブネスになる過程
３．学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第24回大会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計4件

１．著者名 増川ねてる，藤田茂治（編），小成祐介，宮本有紀，木下将太郎，菊池ゆかり，村尾眞治，池田真砂子，鎗内希美子，安保寛明，松井洋子	４．発行年 2018年
２．出版社 精神看護出版	５．総ページ数 296
３．書名 WRAPを始める！―精神科看護師とのWRAP入門 元気回復行動プラン編	

１．著者名 野川道子監修，野川道子，唐津ふさ，髙木由希，平典子，石岡明子，森菊子，米田昭子，橋本茜，二本柳玲子，鹿内あずさ，安保寛明，他	４．発行年 2016年
２．出版社 メヂカルフレンド社	５．総ページ数 458
３．書名 看護実践に活かす中範囲理論	

１．著者名 増川ねてる，藤田茂治編集，安保寛明，宮本有紀，他	４．発行年 2016年
２．出版社 精神看護出版	５．総ページ数 223
３．書名 WRAPをはじめる！精神科看護師とのＷＲＡＰ入門	

１．著者名 横山恵子、藤田茂治、安保寛明	４．発行年 2019年
２．出版社 精神看護出版	５．総ページ数 208
３．書名 精神科訪問看護のいろは	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	笹井　瞳 (SASAI hitomi)		
研究協力者	藤田　茂治 (FUJITA SHIGEHARU)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	横山　恵子 (YOKOYAMA keiko) (80320670)	埼玉県立大学・看護学科・教授 (22401)	